



平成12年度

稻作情報

中通り版
第4号
平成12年7月18日

「ふくしま新世紀農業・農村確立運動」県推進本部

発行：福島の米 稲作情報編集会議
編集：福島県農業試験場

東北地方1カ月予報（7月14日仙台管区気象台発表）

7月15日～7月21日：前線や気圧の谷の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多いでしょう。平均気温は高い見込みです。

7月22日～7月28日：前線や低気圧の影響を受け、曇りや雨の日もありますが、平年同様晴れる日が多い見込みです。平均気温は高いでしょう。

生育状況

- 1) 作柄解析試験の生育：草丈は長く、茎数はやや少ない。幼穂形成始期は、平年より4日～8日程度早い。このため、減数分裂期や出穂期も早まる予想であり、水管理や肥培管理上の注意が必要である。
- 2) 現地の生育：草丈は長く、茎数は県北で平年並からやや多く、県南では平年並からやや少ない。葉色はやや淡く、台風3号による葉先枯れが目立つ。幼穂形成始期は、平年より県北で7～10日、県南で5～7日早い。

表1 稲の生育状況(本場作柄解析試験 7月14日調査)

品種	年次	5月15日移植			
		草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齡	葉色 (SPAD502)
ひとめ ぼれ	本年	64.7	503	10.6	37.7
	前年	54.0	635	10.3	33.0
	平年比・差	108	80	+0.1	+2.3
コシヒ カリ	本年	71.4	522	11.0	32.1
	前年	56.4	630	10.5	31.2
	平年比・差	111	79	+0.5	-1.8

表2 作柄解析試験における幼穂形成始期(月日)

年次	冷害試験地		本場		
	まい ひめ	初星	初星	ひとめ ぼれ	コシ ヒカリ
本年	7.7	7.11	7.7	7.10	7.16
前年	7.11	7.15	7.14	7.16	7.24
平年差	-4	-5	-6	-5	-8

注) ()内の数字は未確定値
-は早いことを示す。

移植栽培の技術ポイント

出穂が早まるため、生育診断に基づいた追肥と葉いもち防除を適期に実施しよう！

- 1) アメダス資料による葉いもち感染好適条件の推定によると、周期的に感染好適条件及び準感染好適条件が出現している。7月第3半旬以降上位葉での葉いもちの発生が予想されるので防除に努める（図2）。
- 葉いもち発生を確認したほ場では、ただちに散布剤（液剤、粉剤）による防除を実施する。
- 降雨が続く場合には、雨の切れ間をねらって薬剤散布を実施する。
- 予防粒剤（箱処理剤または水面施用剤）を施用した圃場や、航空防除の実施地域でも発生が認められたら、散布剤による追加防除を行う。
- 2) 穂いもち対象に粒剤を使用する場合は、剤に応じた所定の時期に湛水状態で施用し、4～5日止水する。
- 3) 本年はカメムシの被害が懸念されるため、出穂前10日頃までに必ず水田畦畔等の草刈りを実施する。カメムシ防除薬剤は、1回散布の場合は糊熟期に、2回散布の場合は乳熟期と糊熟期に散布する。
- 4) 本年は出穂期が早まり高温登熟が懸念される。高温が継続する場合は、用水が充分確保される場合には掛け流しまたは湛水深を深めに確保し、稻体の保護に努める（図1）。
- 5) コシヒカリの葉色は平年よりやや淡い（図3）。コシヒカリについては、葉色の低下が著しい場合、出穂前25日に10a当たり1kgの窒素を追肥する。追肥を実施した場合は、併せて葉いもちの防除を行う（表3）。

技術ポイントの基礎データ等

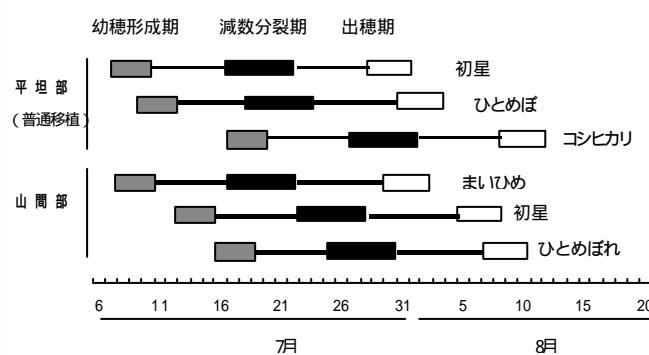


図1 主要品種の生育ステージの予想

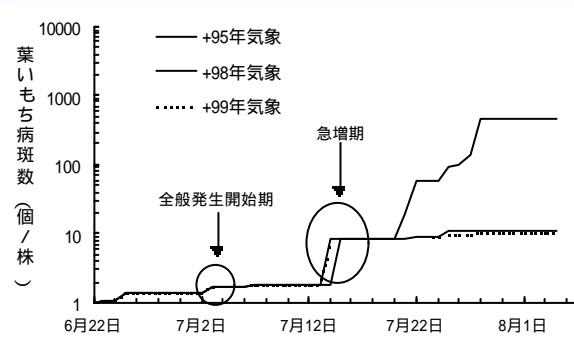


図2 葉いもち発生シミュレーションモデルLASTIによる病害発展予測

（7月11日現在、東白川）

注) 7月12日以降に95年、98年、99年の気象を合成した。

現在、葉いもち病勢が進展中で、7月第3半旬に急激な増加が認められる。

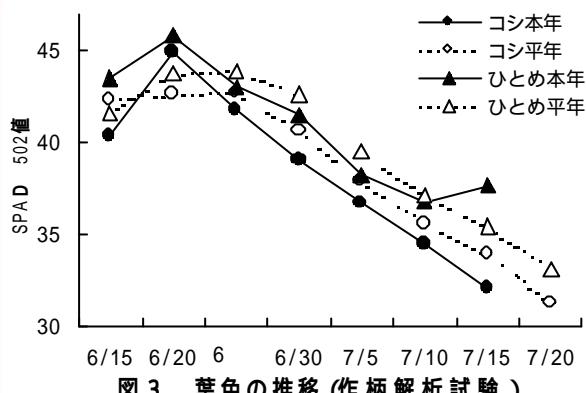


図3 葉色の推移(作柄解析試験)

直播栽培の技術ポイント

生育は順調で茎数がやや多い。倒伏防止のためのほ場の固化と葉いもちの防除に努めよう!

1) 生育の状況

場内作柄解析試験の生育: 湛水直播は、草丈がやや長く、茎数は葉色が急激に低下したことから平年よりやや少ない。幼穂形成始期は前年より6日~9日早まるといわれる。乾田直播は、草丈がやや長く、茎数はほぼ平年並である。葉色は前年よりやや淡い。幼穂形成始期は前年より4日程度早まるといわれる。

現地における生育: 湛水直播は、草丈が平年並からやや長く、茎数はほ場によるバラツキが大きいものの概ね平年並からやや多い。生育は昨年より進んでおり、移植栽培より5~7日程度の遅れである。

2) 当面の技術対策

- (1)湛水直播は、幼穂形成期前まで強い中干しを継続する。特に、播種深度が浅く根が土壤表面に露出している場合、草丈が長い場合、苗立ち数が多い場合は、ほ場全面に亀裂が入る強い中干しを行うとともに、その後もほ場の固さを保ちながら間断灌漑を実施する。乾田直播は、間断灌漑を継続し、中干しは行わない。
- (2)移植稻と同様にいもち病防除を徹底する。
- (3)幼穂形成期を確認した後、移植の生育診断に準じて追肥を施用する。ただし、ほ場が軟弱な場合や播種深度が浅くて株元が安定しないほ場では、追肥を控える。
- (4)前年多発したほ場や生育の遅れているほ場ではイネツトムシの防除を実施する。

技術ポイントの基礎データ等

表5 湛水直播稻の生育状況(本場作柄解析試験)

品種	年次	播種日	調査日	草丈	茎数	葉数	葉色	幼穂形成	始期
		(月日)	(月日)	(cm)	(本/m ²)	(葉)	(SPAD)	(月日)	
本年	5. 9	7.14	59.9	462	10.4	31.4	7.14		
ひとめ99年	5. 7	7.13	48.6	800	9.8	39.1	7.23		
めぼ98年	5. 8	7.14	57.5	607	9.6	34.9	7.23		
れ97年	5. 9	7.16	51.8	501	-	34.8	7.24		
96年	5.10	7.15	44.6	752	9.7	41.4	7.24		
本年	5. 9	7.14	60.4	552	10.0	29.0	(7.21)		
コシ99年	5. 7	7.13	50.5	647	9.6	35.9	7.27		
ヒカ98年	5. 8	7.14	61.2	820	9.2	31.8	7.30		
リ97年	5. 9	7.16	54.4	440	11.0	34.7	7.29		
96年	5.10	7.15	44.4	742	10.0	38.2	7.28		

注) ()内の数字は未確定値

麦・大豆栽培の技術ポイント

- 1) 大豆の追肥 5~7葉期の最終培土前にLPコート70号による追肥を行うか、開花期~開花後10日頃までに硫安または尿素で追肥を行う。追肥量は、窒素成分で0.6kg/aである。開花期追肥の場合は、全面施用すると葉焼けを起こすため、株元施肥とする。
- 2) 中耕培土 雜草防除・倒伏防止、湿害軽減のために中耕培土を行う。開花期以降の培土は根を傷めて収量を低下させるため、行わない。
- 3) 除草剤の施用 晩播無培土栽培では雑草防止のため、必ず茎葉処理剤を施用する。ただし広葉雑草には効果がないので注意する。

表3 コシヒカリの追肥の目安(幼穂形成期)

地 域	目標粒数 (万粒/m ²)	幼穂形成期の診断基準値		
		草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 (カラースケール)
県北	2.9~3.1	70	650~750	2.5~3.0
県南・県中	3.1~3.2	65	650~750	3.0~3.5
幼穂形成期の生育が上記の範囲にあれば出穂前15日に10a当たり2kgの追肥が可能。				
葉色等の低下により粒数が不足すると予想される場合は、出穂前25日に10a当たり1kgの追肥を行う。				
(平成2年度指稻作導指針より)				